国際シンポジウム
「日本の文化変容と異文化――近世から近代へ――」について（報告）

はじめに
1．シンポジウム「プログラム」
2．シンポジウム「報告の部」概略
3．シンポジウム「パネル・ディスカッション」全記録

鳥越輝昭

はじめに

2007年11月17日（土），国際シンポジウム「日本の文化変容と異文化――近世から近代へ――」が開催された。これは神奈川大学人文学研究所が主催した催し物で，会場は神奈川大学23号館201教室だった。

シンポジウムの論題「日本の文化変容と異文化」は，「日本文化」が固定的なものでなく異文化とかかわるなかで変容を続けてきたという基本認識を示したものである。なお，明示してはいないが，変容のなかを貫流する特徴もあっただろうとの認識も背後にあった。

日本文化の変容に際して大きな力として働いたのは，ひとつは中国文化であり，ひとつは西洋，とりわけ英米の文化だった。それゆえ，このシンポジウムでは，報告者・パネリストとして，中国から2名の日本研究者，英米から1名ずつの日本研究者を招き，中国文化・英米文化とかかわるなかで日本文化が変容した局面を照射しようとした。報告者・パネリストたちは，いずれも日本文化を外国文化との関連で研究している第一級の研究家である。また，コメンテーターには，世界のなかでの日本文化の来し方を専門としている研究者を招き，変容してきた日本文化について総合的認識を得ようとした。

報告者・パネリスト，ならびにコメンテーターは以下の諸氏（発表順）である。

＜報告者・パネリスト＞

(1) タイモン・スクリーチ氏
　　ロンドン大学アジア・アフリカ研究院・教授，江戸視覚文化史専攻

(2) 王　勇氏
　　浙江工商大学日本文化研究所・所長・教授，中日文化交流史専攻

(3) 陳　小法氏
　　浙江工商大学日本文化研究所・准教授，明代中日関係史専攻

(4) マーティン・コルカット氏
　　プリンストン大学歴史学部・教授，日本史専攻

＜コメンテーター＞

田中優子氏
　　法政大学社会学部・教授，日本近世文学・近代文化・比較文化専攻

なお，司会進行役は，人文学研究所長である関係で，わたくし鳥越が務めた。

結論からいえば，このシンポジウムは意図した上記の目的をじゅうぶん達成したと思う。聴衆のひとりによるアンケートの感想，「ほんとうにすばらしいシンポジウムでした」は，目的が達成された表れと見ることができよう。

充実した発表・討論・コメントをしてくださった方々に心よりお礼申し上げるとともに，シンポジウ

ムの準備・運営に尽力くださったすべての方々に心より感謝申し上げる。

以下に，このシンポジウムの「報告の部」の概略を記し，「パネル・ディスカッション」全体を収録する。

１．シンポジウム「プログラム」

シンポジウムのプログラムは以下のとおりだった。

---

(1) 報告の部

10：00-11：50　タイモン・スクリーチ

「日本におけるイギリス東インド会社の文化的影響，1613-23 年」

11：00-11：50　王　勇

「新史料『太平抗倭図』について」

13：00-13：50　陳　小法

「『初渡集』からみた日本五山における漢語の変容」

14：00-14：50　マーティン・コルカット

「新生日本のための教育―― 1872 年の米国およびヨーロッパの教育・文化に関する久米邦武の観察」

(2) パネル・ディスカッション

15：30-17：30

パネリスト：

タイモン・スクリーチ

王　勇

マーティン・コルカット

陳　小法

コメンテーター：

田中優子

司会：

鳥越輝昭

２．シンポジウム「報告の部」概略

シンポジウムは，ほぼ上記のプログラムどおりに進行し，10：00 に開始され，17：30 に閉会した。以下に，「報告の部」の概略を記す。

(1) タイモン・スクリーチ氏の報告

スクリーチ氏からは当日の報告に先立ち，つぎの「報告概要」が提出されていた。

「日本におけるイギリス東インド会社の文化的影響，1613-23 年」

タイモン・スクリーチ

イギリス東インド会社はオランダ東インド会社に 2 年先立って設立され，それよりはるかに大きな組織となった。日本における役割はオランダに比べると小さく，また 10 年間しか経営されなかったとはいえ，その存在は不当に軽視されてきたといえる。

周知の通りオランダの商人たちは 1600 年に日本に入国した（ちなみにそのときの水先案内人はイギリス人だった）。オランダ東インド会社自体がやって来たのは 1609 年になってからだったが，ただちに平戸で歓待を受けて商館を設立した。イギリス東インド会社はその 4 年後に到来し，浦賀に商館を開設するよう勧められたが，平戸の方を選んだ。シャムのアユタヤやジャワのバンタムなど世界の他の土地での例に漏れず，二つの会社はここでも隣同士だった。両者はときには協力し，ときには争った。本国同士が戦争中であることさえあった。

この報告ではイギリス人の与えた文化的意義のすべての側面を扱うことはできないが，次の側面に注目することにする。両者は当然ながらカトリック教徒のイベリア人たちから自分たちを区別する必要があり，それには成功した。しかし総じて日本人はイギリス人とオランダ人の違いを必ずしも完全に意識していたわけではなかった。そこでイギリス人は自分たちの国民性を示す試みにとりかかった。さまざまな方法が試みられたが，その中の一つは平戸の大名にイギリスの食べ物を供することだった（のちに何度も求めていることからすると，当時実権を握っていた大名の祖父のお気に召したようだった）。しかしもっとも重要なのは，ロンドンのイギリス東インド会社の役員会が 1614 年に大量の絵画と版画を委託販売品として送る決定を下したことだ。これらの絵の主題はイギリス国家の諸相を示すことだった。まずはロンドンの絵があり，中世の世界における驚異の一つとみなされていた壮観なロンドン橋が描かれていた。次に肖像画と家系図の形で王室を描いた絵も送られていた。三つ目はイギリスがスペインと戦った戦争画であり，それらはオランダがスペイン支配下にあり，イギリスは意味深長にも神聖な嵐，つまり「神風」という奇跡によってスペイン人から護られてきたことを示そうとしていた。これらの絵は概してイギリスを豊かに栄えてうまく管理されている国，神に護られたプロテスタントの独立君主国として掲げるものだった。

船荷の中にはより想像的な絵画も含まれており，ギリシア・ローマの神々を描いたものなどもあったが，特に壮観なのはガリレオの最新の発見を描いた一連の惑星の絵である。私はそのうちの一枚が日本に現存していると信じている。

（訳：村井まや子）

シンポジウム当日のスクリーチ氏の報告は，イギリス東インド会社から日本へ派遣された船舶の積み荷の特徴を中心とするものだった。氏の話の要点はつぎのようなものである。

①イギリス東インド会社が日本と交易をしようとした理由

イギリス東インド会社は，特産品のウールをジャワで売って香料を入手しようとしたが，温暖の地ジャワではウールが売れなかった。ところが，ジャワにいた日本人から，日本ではウールが売れだろうという示唆を受けた。そこで，会社は，日本でウールを売って黄金を入手し，その黄金でジャワの香料を買おうと計画したのである。その際，北極回りという短距離航路の可能性も考慮された。

②イギリス東インド会社船舶の積み荷の特徴

イギリス東インド会社が第三回目に日本に派遣した「ニューイヤーズ・ギフト号」の積み荷には，毛織物，鋏・ナイフ，望遠鏡などの他に多数の油絵が含まれていた。油絵のうち，半数は裸体画，半数は

肖像画だった。裸体画が積み込まれ理由は，第一回の派遣船が平戸に入港した際，現地の「殿のレディーたち」がヴェヌスの絵に感心したからである。

肖像画は，貴族の肖像や英国王の肖像だった。英国王の肖像画は他の国王への贈答用に使われた。「ニューイヤーズ・ギフト号」はアフリカを経由し，インドのムガール帝国を訪れたが，英国王ジェームズ一世の肖像画はムガール皇帝への贈り物にされた。また，ムガール皇帝の先祖ティムールの肖像画も贈られたのである。

「ニューイヤーズ・ギフト号」はジャワに到着したが，船体に問題があったらしく，積み荷の積み替えがなされ，平戸へやってきたのは「トマス号」と「アドバイス号」である。これら二隻の積み荷の記録をみると，大量の油絵が積まれていたことがわかる。ただし，日本にもたらされた油絵のなかに肖像画はなく，エロティックな絵が多数を占めた。また，安価な版画も大量にもたらされた。

版画の主題の特徴は三つある。第一に，英国は日本と同じ反カトリック国であることを宣伝するもの，第二に，英国は日本と同じ王国であることを示すもの，第三に，ロンドンの繁栄ぶりを示すものだった。

(2) 王勇氏の報告

王勇氏の報告は，「倭寇」の本質，「倭寇」を描いた日中の図像，という 2 点に関するものだった。

「倭寇」の本質につき，王氏は，16 世紀という海路による世界的文化交流が活発化した時代背景のなかで，日本側の押し出す力と中国側の吸引力とが作用し，人の異常な移動が引き起こされたものだ，と分析した。日本側の押し出す力は，軍事力・武器の過剰蓄積，中国の文物へのあこがれ，幕府統制力の低下だった。中国側の吸引力は，商品の過剰蓄積，海外貿易への機運だった。

「倭寇」を描いた図像に関する氏の論点は，つぎのようなものだった。

『倭寇図巻』と称されている有名な絵巻（東大史料編纂所蔵）は，じつは倭寇を描いたものではなく，明代の台湾戦役を描いたものである。ただし，描かれているのは日本人である。

『倭寇図巻』の複製画と考えられている中国側の『抗倭図巻』（中国国家図書館蔵）は，じつは複製ではなく，船・服装・兵器などが相違している。その一方で，ふたつの絵巻には共通点もあるから，これら二点は同一画家によるセットの作品である可能性が高い。

中国にある別の倭寇図，『太平抗倭図』は温州の町，太平の攻撃に失敗し捕虜とされた倭寇を描いた絵で，文字史料や考古学的発掘とも照応する正確な記録である。

従来，歴史研究では図像史料が軽視されてきたが，倭寇研究についても未整理の史料が多数あり，今後の研究の宝庫である。

(3) 陳小法氏の報告

陳小法氏からは，シンポジウムに先立ち，つぎのような「報告概要」が提出されていた。

「『初渡集』からみた日本五山における漢語の変容」

陳小法

一．策彦周良と『初渡集』

策彦周良（1501 ～ 1579），諱は周良，別号は怡斎・怡雲子・謙斎，丹波の出身。天文八年（1539）遣明船副使として入明し，天文十六年（1547）遣明使正使として再度入明した経験がある。著述に『策彦和尚詩集』・『南遊集』・『謙斎雑稿』・『城西聯句』・『初渡集』・『再渡集』などがある。

『初渡集』は策彦周良が始めて勘合貿易に携わった時に書いた朝貢日記である。明の嘉靖十七年（日

本天文七年，1538）七月一日から起筆，嘉靖二十年（日本天文十年，1541）十月二十六日まで擱筆。あしかけ三年余りの歳月に跨り，ほぼ十六万字に達し，日明関係史おいては貴重な一次史料である。

二.「東坡」と「味噌」

『初渡集』での用例：

(1) 天文七年（嘉靖十七年，1538）霜月六日：正使恵予以**東坡**十斤。

(2) 嘉靖二十年（日本天文十，1541）七月十二日：大光遣平五郎賜米並**東坡**等。

(3) 嘉靖二十年七月十五日：正使致使恵**東坡**三器，盧陵一袋。

(4) 嘉靖二十年七月晦日：又携才伯贈物之数目，米一俵五斗，**東坡**三升，買臣貳担。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73 巻・史伝部十二，東京講談社，1972 年，同日条）

（一）『花園遺臭録』：「尾濃間末醤（ミソ）曰玉堂，蓋五嶽雅言称東坡，蘇氏故蘇音近醤（ソ），俗作味噌。」（野村常重『鹿苑日録雑話』，『史学雑誌』第四十九編第七号）

（二）『鹿苑日録』：「大豆涵水，東坡之用意。」（野村常重『鹿苑日録雑話』，『史学雑誌』第四十九編第七号）

（三） 安原貞室（1610―1673）『片言』：味噌のからなを東坡と付たるやうのことは。やさしく侍る。かやうのさかひよく心得べしと云う。（『片言・物類稱呼・浪花聞書・丹波通辭』巻四，日本古典全集刊行會，昭和六年，77 頁。）

（四） 大田南畝（1749―1823）『一話一言』（一四）：「三蘇（みそ）といふことか。」

（五）『広辞苑』「東坡」②：（蘇軾及びその父の蘇洵，弟の蘇轍を「三蘇」というが，ミソともよめるので）味噌の異称。

三.「丁々」・「盧陵」・「八八」と米

（一）「丁々」

中文の意：①壮健ぶり，②長く遠いさま，③冷ややか顔，④擬声語，元々は伐採の音。『初渡集』での用例：

嘉靖十七年（1538）七月二日：移居於龍華，携以一束一本。正使新篁和上見贈**丁々**一俵。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73 巻・史伝部十二，東京講談社，1972 年，同日条）

「丁々」というのは「お米」の異称で，出典は『詩経』：「伐木丁々，鳥鳴嚶嚶。」（野村常重『鹿苑日録雑話』，『史学雑誌』第四十九編第七号）

（二）「盧陵」

『初渡集』での用例：

嘉靖十七年七月十五日：正使致使恵東坡三器，**盧陵**一袋。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73 巻・史伝部十二，東京講談社，1972 年，同日条）

「盧陵」はお米の異称でもあり，出典は「盧陵米価」。宋朝僧道原『景徳伝灯録』巻五：ある僧が，六祖慧能の法嗣である青原行思禅師に仏法のことを聞いたら，青原行思は「盧陵米の値段は？」と答えた。

（三）「八八」

『初渡集』での用例：

嘉靖十七年七月八日：阿野備后守宅有小斎，予亦赴之。午後，朴中座元見恵**八八**一盆。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73 巻・史伝部十二，東京講談社，1972 年，同日条）

「八八」もお米の異称である。

四.「煙景」・「一指」と「銅銭」

『初渡集』での用例：

(1) 嘉靖十八年（1539）二月四日：神屋壽禎設斎，蓋統公上司北堂之父春叟元仲三十三百忌辰也。新篁和上有焼香偈。一座見和之，予亦備其員。打嘲予**煙景**。

(2) 嘉靖十八年七月廿三日：辰刻就於東禪家裏，有百座棱嚴咒，正使和上己下赴之。施襯金，正使及予**煙景**，餘**一指**。

(3) 嘉靖十八年九月八日：池永宗巴設小斎，蓋亡親十三年諱也。日頭宗永，一休書之。襯**煙景**。

(4) 嘉靖十九年（1540）七月廿四日：午時呉通事俾蔵人贈**煙景**，蓋為来廿六亡子呉霖周忌也。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73 巻・史伝部十二，東京講談社，1972 年，同日条）

（一）「煙景」

「煙景」は銅銭五百文の隠語である。山岡浚明（？ -1780）『類聚名物考』：「煙景，五百文，五湖煙景有誰争という句より名付しなり。」

（二）「一指」

「一指」は銅銭百文の隠語で，出典は「一指頭禅」という公案だそうである。『五灯会元』：師（倶胝）がある日，袖に刀を隠し，童子に「仏法ができるそうだと」聞いたら，童子から「はい」と返事した。師曰：「じゃなんか」，童子が指を立てて応じた。そのとき師は刀で童子の指を切り，童子は忽ち叫んで飛び出した。師は童子を呼び，童子が後ろを振り向き，師は再び「仏法はなんか」と聞き，切られた指を立てたがった途端に，童子は大悟した。示寂の前に，師は衆に「吾れ天龍一指頭の禪を得て，一生使い切れず。」と嘆いた。（『四庫全書』子部十三『五灯会元』（宋釈普済撰）巻四「杭州天龍和尚法嗣」）

五.「買臣」と「薪」

『初渡集』での用例：

嘉靖二十年七月晦日：又携才伯贈物之数目，米一俵五斗，東坡三升，**買臣**貳担。（策彦周良『初渡集』，『大日本佛教全書』73 巻・史伝部十二，東京講談社，1972 年，同日条）

「買臣」は「薪」の隠語で，出典は「買臣負薪」である。

シンポジウム当日，陳氏は，「報告概要」に則しながら，本来の中国語にはない日本的意味で使用された漢語について報告した。氏が資料にしたのは，16 世紀の禅僧，策彦周良の『初渡集』で，この日記には，見かけは中国語だが，じつは日本語・日本俗語・日本語文法であるものが散見されるのである。

氏が，取り上げたのは，①「東坡」＝味噌，「八八」＝米，②「煙景」＝銅銭五百文，「一指」＝銅銭百文，③「買臣」＝薪，という用例である。いずれも中国語にはない意味で使用されている。

氏は，意味が変化した原因を，言葉の使用される環境が変化したなかで，使用者の直感が作用した結果だろうと推理した。

(4) マーティン・コルカット氏の報告

氏からは，シンポジウムに先立ち，つぎのような「報告概要」が出されていた。

「新生日本のための教育―― 1872 年の米国およびヨーロッパの教育・文化に関する久米邦武の観察」

マーティン・コルカット

1871 年 12 月，岩倉使節団に随行して横浜を出発したとき，久米邦武（1839-1931）は 33 歳（数え年）でした。1873 年の夏に帰国するまでに，久米は世界を旅し，アメリカ合衆国および 10 カ国ほどのヨーロッパ諸国について文化と文明を観察しました。岩倉使節団は単なる外交使節団ではなく，「修学する使節団であり，西洋文化と社会への入門」でもあったのです。

久米は，歴訪した国々で見る西洋文化のさまざまな側面に魅了されました。『米欧回覧実記』には，風俗習慣，男女の関係，オペラなどの音楽，美術館・博物館，大衆向けの新聞などに関する久米の観察が記録されています。しかし，久米の関心をかき立てた「文化」のあらゆる具体的現象のなかで，教育ほど注目を引きつけたものは他にありませんでした。

若く聡明で学識豊かな元武士で和漢の古典を学んでいた久米邦武。日本を出発したときには英語もその他の西洋語も流暢に話せなかったこの人物は，米国（およびヨーロッパの）教育をどのように捉え解釈したのでしょうか。久米はどのような教室や生徒・学生を訪れることができたのでしょうか。目にしたものをどのように解釈したのでしょうか。米国の教育のどのような側面を久米は特筆し，それによって日本人読者に何を訴えたのでしょうか。使節団の旅行記のなかで，久米は「教育」をどのような広がりを持つものと解釈したのでしょうか。久米は教育を西洋文化全体のなかのどこに位置づけたのでしょうか。日本の将来にとって教育がどのような重要性を持つと考えたのでしょうか。

久米が旅行記の冒頭から明言しているのは，西洋諸国の教育施設と教育方法とを視察することが岩倉使節団の使命の肝心な部分であり，そういう視察を記録するのが自分の責任だった，ということです。久米の見方によれば，教育に関する観察こそ日本が変化を遂げてゆくために不可欠な情報を与えてくれるのであり，外交上の議論の詳細より注目すべきものでした（ですから，久米は外交上の議論の詳細に関する記録作業は他人に委ねることにしました）。

しかし，岩倉使節団員たちは，都市から都市へと（しばしば足早に）旅を続けながら，米国ならびにヨーロッパの学校と大学とについて正確には何を見たのでしょうか。教育機関へのこういう訪問は，彼ら視察の当事者たちによってどのように手配され記録され解釈されたのでしょうか。使節団員たちの旅は当初から旅程を定めぬ旅でしたから，教育機関への訪問も直前に手配しなければならないことが多かったのです。しかし，サン・フランシスコの新聞が，日本の使節団が西洋の外交・産業・貿易だけでなく教育についても関心を持っていることを報道し始めると，このニュースは合衆国ならびに世界中の新聞によって報じられました。すると，使節団が訪問するさまざまな都市で学校の門が彼らに開かれたのです。

岩倉使節団の大使秘書・歴史家・記録者として旅をする機会を得たことにより，久米は 10 以上の国々で学校，大学，士官学校，博物館，美術館，新聞社を訪問し，それらを相互に比較することができました。『米欧回覧実記』のなかの久米によるこういう訪問の記録は，おざなりなものでも義務を果たしただけでもありません。あきらかに久米は記録者としての責任を真剣に受け止めてはいました。けれども久米は，使節団の教育専門家たちの関心や訪問を記録する以上のことをしていました。久米自身が，教育――いちばん広い意味の，子供も成人もふくめた教育――という問題全般について，個人・市民・国家を発展させる決定的要因として深い関心を持っていました。久米は，日本は西洋から多くを学ばねばならないけれども，国家を建設してゆく際に日本も教育の改善を利用できるだろうと思っていました。久米がもっとも高く評価したのはアメリカ合衆国，英国，プロイセン，オランダ，スウェーデ

ン，デンマーク，スイスなどの主にプロテスタント国で，そこではもっぱら非聖職者の手で教育がおこなわれていました。とりわけ，久米がくりかえし主張したのは，教育は生まれや貧富や社会的地位にかかわらず，すべての市民に提供されるべきだということでした。

マリウス・ジャンセンがいったとおりです。「日本の現状と将来の進路とについて，『米欧回覧実記』でなされた以上に思慮深く博識な議論を想像するのは難しい。『実記』の教訓は明瞭だった。それはすなわち，日本が，教育ある国民の団結している国だけが勝利するような高度に競争的な世界のなかにすでに入っている」，というものだったのです。

（訳：鳥越輝昭）

シンポジウム当日，コルカット氏は，「報告概要」にあるとおり，久米邦武が米欧の教育に何を見，何を考えたかに関して報告をした。氏の主要な論点はつぎのようなものだった。

久米の『米欧回覧実記』では，教育に関する記述が大きな部分を占めているが，これは久米の関心のあり方を反映したものである。久米は，日本の将来の国づくりに教育が欠かせないと考え，米欧の教育の良い面を利用するべきだと考えていた。

久米は，米欧について，広い意味の市民教育がなされている点に注目した。博物館や公共図書館のような施設が人づくりと国づくりに貢献しているのを見て取ったのである。久米は，公共図書館では，書籍が市民の閲覧に供せられていることに注目し，また，古代の文献，つまりは歴史が大切にされていることにも注目した。

久米は，全体として米国の教育を高く評価したが，その主な理由は，①子供たちの教育が行き届いていること，②めぐまれない人たち（盲人や黒人）の教育にも力が注がれていること，③プロテスタント国であるため教育に聖職者が関与していないこと，だった。

シンポジウムの「報告の部」は，以上のような内容をもって終了し，休憩を挟んで，「パネル・ディスカッションの部」に進んだ。

２．「パネル・ディスカッションの部」全記録

「パネル・ディスカッションの部」は，予定よりやや早い 15:10 に開始され，予定どおり 17:30 に終了した。パネル・ディスカッションについては，その全体を次頁以下に収録する。

国際シンポジウム「日本の文化変容と異文化―近世から近代へ―」
パネル・ディスカッション

2007 年 11 月 17 日

鳥越　お待たせいたしました。これからパネル・ディスカッションに移りたいと思います。ここから初めてご出席の方もいらっしゃるかもしれませんので，今日のタイトル「日本文化の変容と異文化」についてもう一回申し上げます。後ろの黒板に張ってあるものなんですが，少し考えがあって付けたタイトルです。今おりますところは 23 号館といって，この大学でいちばん新しい建物で，数年前だったでしょうか，にできた一種ポストモダン風の建物なんですが，これも日本文化の一つの表れですし，鎌倉の建長寺のようなものも日本文化の表れで，東京駅ももちろんそうです。日本文化というのも固定的なものではなくて，ずっと変化し続けてきたのだろう。それについては，いつも異文化が大きく力として働いていて，それとのかかわりのなかで日本文化というものが形をずっと整えながら……，整えているか

どうかわかりませんが，自己定義をしながら変わってきたんだろう。ただ一方ではひょっとすると変わらないものもあったのではないか。そんな思いも込めて付けたものです。

今日はそういう話題を扱うのには本当に最適な，いまおそらく望み得る最高のパネリスト，そしてコメンテーターをお招きできたと思っております。あらためてご紹介申し上げたいのですが，今日の発表順ということでご紹介申し上げます。

いちばん私から遠いところにいらっしゃるのが，タイモン・スクリーチ先生，ロンドン大学のアジア・アフリカ研究院の教授でいらっしゃいます。江戸の視覚文化史をご専門になさっています。お隣が王勇先生，浙江工商大学日本文化研究所の所長でいらっしゃいまして，教授でいらっしゃいます。中日の文化交流史のご専門。そしてそのお隣が陳小法先生，同じく浙江工商大学の日本文化研究所の，準教授でいらっしゃいます。ご専門は明のころの中日関係史です。そのお隣が，マーティン・コルカット先生，プリンストン大学の歴史学部の教授でいらっしゃいます。日本史をご専門となさっています。それから，このパネル・ディスカッションから初めてご参加ですが，実は今朝からずっとお話を聞いていただいておりました法政大学の田中優子先生。社会学部の教授でいらっしゃいます。ご専門は日本の近世文学，近世文化，比較文化。会場のみなさんに差し上げております冊子の表紙裏のところをご覧ください。田中先生についても，他の先生方と同じく，ご業績を先生にどうか3点に絞ってくださいとお願いして3点だけにさせていただいております。先ほど申し上げましたような世界とのかかわり，そしてアジアとのかかわりで，日本の文化をとらえるという研究をずっとなさっている先生でいらっしゃいまして，今日のコメンテーターとしては最高のコメンテーターをお招きできたと思っております。

そして今朝ほど来の話なんですが，まずスクリーチ先生が英国の東インド会社と日本との関係ということを，ちょっと盲点と言えそうなところをお話しになられました。英国から船で長々とアフリカ，インド，ジャワ，そして日本にやってくる，その間に積荷はどう変わったとか，図像の面から興味深いお話をしてくださいました。

そして王勇先生，倭寇というものについての中国側に残っている図像，そして日本側に残っている図像を比較検討なさってお話をしてくださいました。

そして陳先生，やはり明のころのことですけれども，中国語の漢語の意味，それが日本に入ってきてどう意味が変わったかというようなお話を伺いました。

そしてコルカット先生からは，明治になって久米邦武がアメリカに行って，その当時の教育に大変感心した。将来の日本の手本にもすべきようなものとして，アメリカの教育を見たというようなお話をしていただきました。

それで，このパネル・ディスカッションの進め方なんですが，4人の発表者の方々，たぶん言い足りないことがおありだと思います。あるいはまたこの点を特に強調したいということがおありかと思います。それについてそれぞれの先生に15分くらいお話をいただいて，そのあとコメンテーターの田中先生からコメントをいただきながら，そして同時にそれぞれの先生に対する質問も出していただいて，その質問を受けてそれぞれの先生方からお答えをいただいて，だんだん話が盛り上がってきたところで，フリー・ディスカッションというようなところにもっていけたらなと思っております。

さっきも「報告の部」の最後に申しましたが，本当にプラトンの『饗宴』のようなシンポジウムになればなと，今日は本当になるんじゃないかと楽しみにしております。それではスクリーチ先生からお話をお願いします。

スクリーチ　今いただいた質問の答えでいいでしょうか。

鳥越　それでも結構です。

スクリーチ　実はいただいた質問が3枚ありまして，ちょうど付け加えるべきことだと思いますので。質問してくださった人の名前書いてないんですけれども，ありがとうございます。一つは情報ですが，

間違えたのはわかっていたんですけれども，直す時間がなかったせいで……。バケットの絵をお見せしたときに，『受胎告知』の漢字を間違っています。たぶん見ればすぐわかったと思いますが，僕もわかっていたんですが，ちょっと直す時間がありませんでしたので，失礼しました。

それともう一つはイエズス会，あるいはガイ・フォークスがジェームス一世を暗殺しようとしたという話をしまして，その歴史的な事実があって，コックスというイギリスのカピタンがそのことについて将軍のセクレタリーに話をしたのが，おそらくイエズス会が日本から追い出された原因の一つではないかと言いました。

このいただいた質問は，なぜただの商人のことを将軍家がそんなに大事にしたか，ただのイギリス人から聞いたうわさ話を聞いて，なぜそれを信じてイエズス会を追い出したかという質問です。いい質問ですね。もちろん証拠はありません。ただそういう事実があって，その数年あとでイエズス会が日本から追い出された。一つのイギリス人の言葉で幕府の行動が変わったということはもちろんありませんでしたけれども，日本側でも少しずつ，イエズス会の人が力を取ろうとしすぎていると考えていた。それとおそらくメキシコからもフィリピンからも情報が入って，別にイギリス人が何も言わなくても，日本側にイエズス会の人をちょっと抑えないといけないという考え方があったと思います。これはただのもう一つの情報だったでしょう。といっても，ただの商人だったかもしれませんけれども，やっぱりリチャード・コックスというカピタンが長い間，10 年間ずっと日本に住んでいて，何回も江戸に行ったんですね。1 回目，江戸に行ったときに秀忠の大広間に呼ばれた。彼は廊下に座っていて，「どうぞ入って」と言われて，入らなかったんです。遠慮して，そのまま廊下に座っていたという記録があります。それに徳川幕府が非常に感心したんですね。威張って入ってくるのではなくて，外で遠慮して，遠い国のただの商人でも礼儀正しいと。日本の記録ではないんですけれども，コックスは自分の日記で，私はこうして，そのおかげで僕の幕府に対しての株が非常に上がった，と言っています。

大使がもし日本に来たとすれば，大使の言っている言葉がもっと重視されたかもしれませんけれども，商人しか来なかったせいで，そういうヨーロッパの情報をわかりたければ，商人のインフォメーションを聞くしかなかったんです。というようなぐあいです。

それと三つ目の質問は，これもいい質問ですが，絵が日本に来たということを言いましたけれども，日本で何か美術史上の影響があったかどうか，日本の絵画史のなかに影響があったかどうか。それと文学でも，英文学がそのとき日本に入ったかどうか。同じ方の質問ですが，女性，日本の妻，愛人とかそういう人がいちばんイギリス人に親しかったはずですから，そのルートでどういう情報が日本に入ったか，という質問です。

三つの質問を順番に答えようとすれば，日本の美術史上で，正直に言って，今まで影響があったという資料は見つかっていません。何十点が日本に入ったということがあって，その商館がだいたい 6 カ月ごとに在庫するものをリストアップするんですね。1 回やって，次回にリストアップしていないなら，それは売ってしまったという意味です。絵画がリストから出てこなくなったのは売ったという意味です。あるいはプレゼントとしてあげたという可能性もあります。だから日本人がそういう絵をもらった。それ以上の情報は残念ながら，今のところ僕にはありません。もちろん日本の日記とか書簡に，この絵を買った，どうのこうのとか，それが見つかれば，すばらしい資料になりますけれども，ちょっとわかりません。

一つだけ，今ポルトガルの個人蔵になっている屏風なんですけれども，その屏風がわりと典型的な，半分が典型的な南蛮屏風です。3 人くらいの，国はもちろんわからないんですが，白人が描かれています。左の半分にちょっと歌舞伎者ぽい，娼婦かな，遊郭図屏風に出てきそうな日本人が出てきます。この屏風はですね，もともと一隻二双で，もう一つの屏風があるはずなんですが，今のところ，その片方しか残っていないです。

これは西洋人と日本人の出会いで，それ以上よくわからないんですけれども，左側にカタカナでリカルドと書いてあります。コックスのファースト・ネームはリチャードですから，コックスの肖像画ではないかと思います。もちろんリカルドというだけですから，リチャードという人間，あるいはポルトガル人でリカルドという人がほかにもいたんですから，その絵が本当にコックスの肖像かどうかわかりませんけれども，コックスは10年間，日本に滞在しましたし，日本人の妻がいて，それに彼は歌舞伎者と遊ぶのが大好きでした。彼の日記を読むと，何回も「歌舞伎を呼んで宴会をした」という記録があります。

歌舞伎者はもちろん本当の今で言う歌舞伎の演技者ではなくて，踊り子といいますか，半分娼婦で，エンターテイナーみたいな役割をする女性です。だからそういうような屏風がもしコックスの肖像画であるとして，直接ニューイヤーズ・ギフト号が持ってきた貨物と関係があるかどうかわからないのですが，ともかく，ちょっとだけこういうような交流があったようです。

それともう一つ，僕は今日はイギリスからのものしか話題にしませんでしたけれども，日本からイギリスへのものもあります。二つのグループのものです。一つは一隻目に日本に入るクローブ号ですね。1623年に日本に入った。それにはやっぱり大使も，イギリスからの大使も乗っていたんです。その大使が江戸まで行って，秀忠にプレゼントをあげました。ウールです。そのあと駿府に行って，隠居生活をする徳川家康にもプレゼントをあげて，それは望遠鏡でした。それと時計，あとは布。家康からも，海外から来たら当然何かもらう。彼が何をもらったかというと，ジェームス一世に差し上げるためのプレゼントはやっぱり屏風でした。十隻の屏風です。

おもしろいことに，家康が言ったのは，「この駿府にイギリス国王にふさわしい屏風がありませんので，平戸への帰りに京都に寄って受け取ってください。」コックスは京都に行って，屏風がまだできあがっていないので，10日間くらい待っていて，やっと二条城に呼ばれて，そのジェームス一世のための屏風を受け取るんです。残念ながら画家の名前は出てきませんけれども，狩野派の人が作ったかもしれません。日本側の記録にもその記述が出てきます。金箔屏風と書いてあります。画題は書いてないんです。

そういう屏風がいよいよクローブ号に載せられ，ロンドンに無事に船が着いて，ジェームス一世にそのプレゼントをあげることになるんです。出入商人のサー・トマス・スミスは，国王へのプレゼントだから，チェックするんです。彼は家康からの屏風を見て，半分これは国王にふさわしいと決めて，半分がふさわしくないと。どういう基準で彼が決めたのかわかりませんけれども，半分ジェームス一世にあげて，ジェームス一世は大喜びした。ジェームス一世は地理学をとても熱心に勉強した人で，だいたいコックスが日本から戻ってきたら，必ず会いたいと言いました。結局コックスはイギリスに帰る途中で死んでしまいますので，対面することはできませんでしたけれども，ジェームスはその屏風を大事にしたそうです。

ただ残念ながら，あとで，今のバッキンガム宮殿ですけれども，当時のホワイトホール宮殿の火事があって，消失してしまって，そのなかにあった絵画も残っていないです。ただし，ジェームスにふさわしくない屏風を東インド会社がロンドンで競売しました。買い手の名前が全部リストアップして残っています。値段も載っています。だいたい高くて10ポンド，安くて5ポンドくらい。屏風はセットだとイギリスでも考えていて，それぞれ，だいたい5ポンドから10ポンド，題名も書いてあります。題名はイギリス人が勝手に作った題名ですから，花鳥画，軍馬図，鷹図と風景画くらいです。たぶん国王のもらったものがたくさんあったのでしょう，途中で傷まなかったものとか。それでも，たくましそうな国王に花の絵をあげないんですね，西洋では。だからそういうものはジェームズにあげなくて，売ってしまった。とにかくけっこういい値段になったんです，競売で。そういうものがただの遠くからの変なものではなくて，美術品，鑑賞する価値のあるものの値段になりますから，アートとしてのグループに

入っていた。それが一つ。

もう一つは，さっきも言いましたね，イギリス大使が日本に滞在中に，ヴェヌスの絵が彼の個室にあって，平戸の人がそれを見て感動していた。その同じ大使です。彼は平戸に滞在するうちに，春画を買いました。「ラシヴィアス・ブックス・アンド・ピクチャーズ」を買った。それは「春画」，「枕絵」の意味なんです。彼がイギリスに帰国して，ロンドンに住まいがなかったせいで，日本から持ってきた荷物は全部サー・トマス・スミスの家に預かったんです。大使はあちこちで友だちに会ったり，自分の密貿易の焼きのものを売ったり，ロンドンのあちこちの商人が集まるところに行って春画を見せたんです。友達に見せて，売って，儲けたかもしれません。

そのことが結局サー・トマス・スミスの耳に入って，そういういわゆる汚い卑猥物が自分の家にあるということがわかっていて，すごく怒っていて，君がそういう人なら，あなたのキャリアはこれで終わりです。その大使のセイリスが，これで彼のキャリアの終わりになったら困りますから，結局全部渡してしまうんです。スミスは，ロンドンのいわゆる株取引所みたいなところのコートヤード〔＝中庭〕のなかで焚き火をして全部焼くんです。こういう卑猥物は東インド会社は一切取り扱わない。残念ながらまったく残っていない。

残っているとすれば，それはいちばん古い春画になります。中世の日本の春画がちょびっと残っていますけれども，江戸初期のものはほとんど残っていないです。だいたい師宣以降です。それは残念です。ただし焼かれてしまう前にセイリスがあちこち見せていたんですから，たぶん人にあげたりしたかもしれません。だからどこかに残っている可能性があります。

女性のルートは非常に大事だと思います。この時代だけではなくて，出島のオランダ商館の時代もそうです。みんな日本のガールフレンドあるいは妻，ちゃんとした結婚をしていないでしょうけれども，そういう関係を結びます。オランダの出島のときになると日本側の女性はみんな娼婦，遊女ですが，この平戸商館の時代はそうではなくて，普通の市民の女性です。だからそのルートで必ずそういうことがありました。そういうイギリスの書簡とか日記を読むと彼女にこういうプレゼントをあげたとか，こういうものをもらったとか，そういうような交換があります。ときどき女友達に絵をあげたという記録が残っています。題名は書いてないんですけれども，そういうような事実があった。

鳥越　それでは王勇先生から。

王　内容の補足よりももっとメインテーマに合わせて言いたいことがございます。文化交流について故大庭脩先生は，文化は人と物によって運ばれるものだと言っておられます。それは一般論としては間違いございませんが，しかし地域によって，あるいは時代によって，一律には言えないところがございます。特に日本の場合は海に囲まれているし，人間の往来を極端に制限されている地理的な条件，あるいは日本の文化の伝統性などによりまして，日本と中国だけではなく，諸外国との交流を見ますと，人間に頼るところが非常に少ない。つまり人間よりも，物によって文化の流通，流入が行われるという特徴を指摘することができると思います。

私の専門は遣唐使時代です。日本の国際交流と言えば遣唐使，また辞書を調べても，遣唐使と言えば日本の使節ということになります。しかしよく調べますと，唐の時代，中国と交流する国家，あるいは民族は70くらいありまして，日本はそのなかの一つ，あまり目立たない一つなんです。中国と朝鮮半島はほぼ毎年1回，使節の往来がありますし，またペルシャとかアラビアなどとは少なくとも3年に1回の頻度。日本からは20年に1回しか遣唐使が出されていません。20年に1回というのは，人間による文化の伝承は不可能に近い時間的な隔たりです。

特に日本の留学生，正しくは「ルガクショウ」と言いますが，1回留学しますとなかなか帰国できませんでした。留学生という言葉自体，日本人が発明したんです。非常に悲しいイメージのつきまとう言葉です。（笑）というのは，帰れない学生，という意味なんです。「還学生」，つまり帰れる学生は幸

いです。同じ船で帰る。それで帰れない人は，泣きながらとどまって勉強する。20 年に 1 回ですと 40 歳，平均寿命がだいたい 40 歳。それに，私は冗談で言うんですが，帰っても使い物にならない。年金生活を送らなければならない。（笑）1 回，帰国のチャンスを逃したら 40 年です。だいたい私たちが今知っている記録で，19 年以上帰れない人は日本語をしゃべれなくなる。こういう例が 2 例あります。遣唐使 1 例（円載）と，五代の，遣唐使のあとのころ（超会），日本語をしゃべれなくなった。帰っても使い物にならない。こういうことを考えますと，学生を送っても，そういう学生が文化を伝えるというのはなかなかできない。だから日本ではこういう状況を考えますと，人間よりも，物による交流，それが特徴の一つだと思います。

物についても，また日本的な特徴が見い出されます。たとえばいつも私たちは文化交流といえばシルクロードといいます。中国と西側諸国の交流はやはり目に見えるもの，物質文明の交流がメインだったんですけれども，日本と外国との交流，特に前近代までに限ってみれば，江戸時代では商船が多くなるんですけれども，江戸時代以前は中国に行っても，商品を求めないですね。

中国の唐代の歴史書，『旧唐書』・『新唐書』というこの時代の歴史書としていちばん権威のある本を見ますと，日本人は唐王朝からもらったシルク・陶磁器を全部中国で売ってしまうんです。売って何を求めるかといいますと，「本を買って海に浮かんで帰る」と書いてあります。常識では考えられないことです。当時，中国と交流する国々からは交易使という使節が，私が調べた資料でいちばん頻繁なときには特に西側から年間十数回，平均月に 1 回，使節が来るんです。中国側には，外国に対して何年に 1 回来る，という規定があるんです。朝鮮半島は，歳貢といって毎年来なければならない。日本については，1 回目の遣唐使のときに，日本は遠いから毎年来なくてもいいと。実際は 20 年になったんです。西側諸国はシルクの商人なのに，使節だと偽って中国に来るんです。目的は商売です。中国も知っていて，ときどき退けるんです。

こう考えますと，特に日本側と西側諸国では，中国との交流の目的が違う。求めるものが違う。同じく交流といっても，シルクとか陶磁器とか，そういうものではなくて，むしろ遣唐使時代に限ってみれば，シルクの交流は日本側が中国に大量に輸出しているんです。日本の遣唐使が中国へ持っていくお金というのは『延喜式』に書かれています。朝廷からもらう資金は全部シルクと布類なんです。ほかのものはほとんどないんです。

また円仁の日記などを読みますと，実際中国でものを買うときには布とシルクで買うんです。この本を買いたいとなると，布何尺か測って切る。だから日本が中国にシルクを輸出しているんです。日本は，そういう中国とか朝鮮半島との交流で求めるものは書物関係のものが多いです。それが他の外国と違うところです。

そういう書物を，しかも選択的に選ぶ。中国から輸入した本を中国人と同じように読み，四書，五経とか同じ本を読み，また日本的な理解を示して，ときどき誤解しているんです。中国の本を誤解したり，あるいは日本的な解釈をして，独自の知識体系ができたんです。それが非常に重要です。だから日本的な儒教にしても，道教にしても，仏教にしても中国そのままのものではないです。中国人から教わったものではないです。中国の本から教わったんです。本の理解は人によって違うから，日本的な理解で成り立った知識体系があるわけです。

その知識体系は日本人のなかで継承されているんです。遣唐使時代からずっと続くわけです。日本の「六国史」などを読みますと，遣唐使が帰るために「消息」を持ち帰る。「唐消息」という。中国の新しい情報を持ち帰る。朝廷に報告する。新しい情報に非常に敏感，あるいは古いものの蓄積があるから何が新しいかよくわかっている。それはびっくりするほどです。たとえば中国の皇帝の息子が何人いた，そのなかで 1 人は足に障害がある。そういう情報は中国の史料にもない。しかし日本人は詳細に把握しているんです。それがおそらく本日の本題にかかわる時代で言えば，鎖国時代の風説書がそれに当り，

外国の情報には非常に敏感なわけです。

独自の知識体系を築いた，しかも蓄積し継承したうえで外国の新しい知識や新しい情報に敏感に反応して，自分に合うものを摂取してきた。その摂取したものを日本的な知識体系に組み合わせるというのが，日本文化あるいは異文化とのかかわりにおいての日本文化の顕著な特徴ではないかと思います。

私への質問が一つあります。古い友人の鈴木先生〔＝鈴木陽一神奈川大学教授〕が，私が寂しくならないように質問をしてくださいました。図像と現実の関係をどう理解すべきか。特に明代の中国で日本人をリアルにとらえることができたのでしょうか，あるいは何かパターンで表現していたのでしょうか……。非常に鋭い質問ですね。要するに一つは絵画的な写実性です。もう一つは，中国の日本知識はパターン的に継承しているのか，あるいは独創的なものが明代にあったのか，という二つの考えがあったことと思います。

中国の絵画は写実的なのか抽象的なものなのか，そういうところは私は専門外でわからないですが，しかし中国の日本知識については，中国にとって日本は基本的にはどう認識されていたかは，一つの言葉で十分に表現できると思います。「絶域」と表現されています。「絶域」というのは，要するに人間が知る限りでいちばん遠いところ，人間がほとんど行かない，行ったら帰れないところ。よく言われることですが，遣唐使時代，中国人は日本に行きたがらなかった。実は中国の本を読みますと，日本に行けば，帰る保障がゼロに近いから，そういうのです。100 人行って 1 人生きて帰れれば奇跡だ。「絶域」というのは，要するに認知範囲外。そうすると日本に関する知識はほとんど古い知識の継承。これは鈴木先生がおっしゃるとおり，ずっと継承してきました。

しかし，ときには日本が重要になる。明代，強い日本が現れてきたんですね。当時は北には騎馬民族，南には倭寇，要するに中国の国家安全を脅かす重要な存在になってきました。そのとき，明代には中国歴史上，初めての日本研究のブームが巻き起こったんです。大量の著作が表れてきます。そういう明代の日本研究の著作の解題をされたのは陳さんなんです。インターネットで公開されていますが，陳さんが扱ったのは何冊くらいか，300 冊くらいあったかな，それくらいの研究書の解題をされた。これは日本，中国のみならず英語サイトでも数多くダウンロードされている。

そのなかで，日本を写実的にまじめに，等身大の日本を見なければならない時期が来たわけです。研究者のなかでは，日本語の勉強，カタカナ，ひらがなの勉強ではなくて，和歌の翻訳もするし，清代よりも精密な日本地図が書けたのが明代なんです。海防，軍事的な需要から日本の地図を日本の捕虜から聞き出す。日本に行った人，経験者から日本の情報を聞き出す。そういう時代に描いた図ですから，未曾有の正確さだった。ところが清代，日本との関係が緩和されると，また日本への考え方があいまいになるんです。日本は三つの島からなっている。三つの島の名前は蓬莱島とか，方壺とか，瀛州とか，こういうあいまいな知識が来るんですが，明代だけは軍事的な需要から日本の知識がかなり正確に伝えられているわけで，その背景下で描かれた倭寇図ですから，非常に精度が高いと思います。

鳥越　それでは陳先生，続けてお願いできますでしょうか。

陳　1 カ月ほど前に鳥越先生から日本文化を貫流するものについて話してくださいと提案をいただいてから，ずっと考えてきました。私の専攻は明代の中日関係史ですから，結論に触れる前に，まず明時代の中日交流史で起こった三つの代表的な文化現象を思いつきました。一つ目は渡唐天神像のことです。もし皆さんが室町時代の絵画に興味を持つものなら，必ず渡唐天神像に遭遇したことがあるはずだと思います。渡唐天神像の描いたものは，天神，つまり平安時代の文学者，菅原道真が海を渡って中国禅僧界の大立者，無準師範という禅僧に参禅したということです。

そもそもは荒唐無稽な話ですけれども，室町時代の禅林でかなり流行っていたそうです。そしてこの話をもとに 14 世紀ごろ絵画化した画像がすでに出ていましたが，画像はほとんど同じパターンで，唐服をまとった隠士風の人物が頭巾をかぶって，この頭巾は東坡巾ではなく，道士のかぶった帽子みたい

な頭巾ですね。右手あるいは左手に必ずひと折の梅の枝を持っています。そして肩から斜めに頭陀袋のようなものをかけています。

今，渡唐天神像の蔵品は日本では100点を超えたと報告がありますが，ほとんど同じパターンです。若干の違いが見られますが，つまりこの梅の枝は左か，あるいは右か，そして頭陀袋は左か右かの差です。さらに画像のうえに，当時の禅僧によって書かれた賛辞がかならずあります。さっき申し上げた策彦周良も，何枚も渡唐天神の賛辞を残しています。

この画像の画題について，いったいどこから来たかを知ろうとずっと昔から試みていましたが，一つの説として，日本のお坊さんが生み出した絵空事だとずっと記載されていました。つまり想像したものだというのです。中日関係史に携わっている多くの学者はこれを疑問に思い始めています。なぜかと言えば，中国と盛んに交流した時代に，中国ではもしかして日本の渡唐天神像のようなものは，記載にあるのではないかと疑問に思いました。

実際のところ，中国の『続伝灯録』という書物に，よく似ている話が記録されています。そのだいたいの意味は，菅原道真の参禅していた師匠，先生の無準師範が，ある夜，偉人から植物の茅を授かったのを夢で見ました。翌日，寧波清涼寺というお寺から禅師の入院を懇願する便りがきました。入院して見たところ，伽藍に夢で見た天神がいるんです。その衣装，そして名前，まったく同じです。

この資料を見ると，日本の渡唐天神像と少なくとも二つのところが似ていると思います。一つ目は夢，キーワードはこの夢です。幻想と現実を結びつけるのは中国でも日本でも夢です。夢あればこそ，菅原道真が海を渡って徑山の無準師範に参禅することができたと思います。

二つ目は茅，つまり無準師範が夢で見た植物，茅。中国では茅と菅原の菅はときどきは同じ植物を指しています。ですから，以上の資料から分析すれば，渡唐天神の説話は，もともとは中国での無準師範と天神の話をもとに，渡唐した日本の禅僧によって固有名詞の菅原道真に再生されたものではないかと思います。

二つ目の文化現象は五山文学。先ほど王勇先生のお話のなかにもちょっとありましたが，五山文学について，私は二点に分けて話したいと思います。一点は文体です。さっき私の発表でもちょっと触れましたが，この文体は中国文に似ていますが，完全な漢文ではなさそうで，日本のものがたくさん入っています。ですから，私はこれはむしろ一つの再生した中間文体ではないかと思っています。今普通の中国人は，もし日本語の背景がなければ，なかなか読みにくいですね，わかりにくいと思います。

五山文学についてもう一点は，誤読のことです。私は禅僧の日記を何冊か読んだことがありますが，この日記のなかに，中国の書物を読んだ感想文がたくさん書いてあります。もちろん作者だけではなくて，友だちの感想文も自分の日記に入れています。この感想文を見て，中国人の立場から見れば，たくさん誤読あるいは間違っているのではないかと思いました。しかし，広い視野に立ってものを考えると，その違ったところは，原文を超越したのではないかと思います。あるいは，日本人は自分の主体性を発揮しながら中国の書物を理解しているのではないかと思います。

私のさっきの発表に出ていた「買臣」ですが，中国では買臣という人物のすばらしい精神に絞っていますが，日本に伝わってからは，この買臣という人物の背負っている柴に，物質に着眼してしまいます。この差を生む原因はただ間違いという一言で終わりそうもないと思います。

そして三つの文化現象は日本の趣味。日本のものが，明の時代にたくさん中国に輸出されて，だんだん中国の文人の一つの愛着品となってしまいます。日本が明国から持ち帰った物にいちばん多いのは銅銭ですね，お金。次は書物と生糸，そして陶磁器などもあります。また中国に輸出していたものは公と私に分けています。朝廷には主に硫黄，そして馬，これが中国に輸出した主なものです。そして個人向けの貿易品あるいは交易品は，主に工芸品の太刀，扇，漆器，螺鈿などです。もちろん妙なものもあります。たとえば春画，日本で作った春画，これは中国の一般の市場にも流れ込んでいたらしい。沈徳符

という明人が日本の春画を1枚所蔵して，国産よりずっといいと絶賛しています。

これを見てわかりますが，明代の中日文化交流は，ただ中国から一方的に日本へ流れ込むのではなくて，まさしく循環，環流しています。これこそ文化交流の持つ本当の意味だと思います。以上の三つの文化現象をざっと見たら，あまり関係がなさそうですが，実は共通性らしいものがあります。それは再生化です。中国の有名な作家，日本文化にも造詣が深い魯迅のお弟さん，周作人ですが，彼は，なぜ日本文化が再生できるのか，それは日本の国民性に何か関係があると言ったんです。彼はこのように分析しています，日本人の特性は二つあります，一つは現世思想，これは中国人にもあるものです。二つは美の愛好，美の愛好は中国人が欠乏しているものです。中国では，美を愛する心はだれも持っているという言い方がありますが，周作人の言う，日本人のこの美の愛好はたぶん普通の美意識の美ではなくて，物事を美しくする心だと私はそう理解しています。言い換えれば日本人は一方的に外来思想，あるいは異文化を受けてばかりいるのではなくて，やはり自分の主体性を発揮しながら外来文化を再生しているのではないかと思います。

現象学の有名なドイツ学者，フッサールの言葉を借用すれば，これは相互主体性あるいは間主観性だと言えます。この言葉がふさわしいかどうか，あるいは正しいかどうかわかりませんが，これが私の考えです。以上です。

鳥越　それではコルカット先生，お願いします。

コルカット　いただいた質問から出発しましょうか。質問は，久米邦武と文部大臣，森有礼はどのような関係だったのでしょうか。久米と森の関係ですね……。久米と使節団がワシントンに着いた晩は1872年の2月29日だったのです。そしてボルティモアから汽車でワシントンに入って，大雪になった。もう電報でみんなわかっていたんですけれども，使節団はその晩にワシントンに着くはずでした。みんな一晩待っていたんです。アメリカ政府に頼まれた軍人で，そこからの案内の責任を持つマイラスという方はその一人だったんです。ほかの方たち，若い留学生，アマーストとかラットガーズとか，それぞれの大学から若い日本人学生がワシントンに出て使節団を待っていたんです。そのグループに森有礼もいました。

そのときに森は25歳だったんです。彼は1847年生まれで，もう20歳にならないうちに1865年，幕末ですね，イギリスへ行って，イギリスで英語と物理学と数学とかいろいろ勉強して，明治維新あたり，1868年，日本へ戻ってきて，明治政府の指導者たちとうまくいって，明治の初めを日本で過ごして，すぐそのあとワシントンへ行かされた。森有礼はまだ30歳にはなっていないけれども，ワシントンでの日本の代表でした。彼は英語が得意で，イギリスの経験もあったし，非常に明るい人で，活発で，ワシントンのブラウン大統領の外交の面倒を見たハミルトン・フィッシュと非常にうまくいったんです。フィッシュは年上で，アメリカの貴族的な家族の出身で，この若い日本人が大好きで，自分を森有礼の外交のうえのメンター〔＝指導者〕として扱っていたらしいです。

それで森は若いくせにワシントンでかなり影響力を持っていたんです。そして使節団についての情報がどんどん入ってきた，これからどうするとか。森はフィッシュに，日本の明治天皇を代表して大事なグループが来ますと，これは大切ですよと一生懸命言って，フィッシュもおそらくブラウン大統領に，これからの使節団は前のものとは違う，と言った。この使節団が非常に大切，カリフォルニアの将来の開発，アメリカのアジアとの関係のためには非常に大切という認識を，森は一生懸命働いて，高めようとしたと思います。アメリカ人もそのとおりだと感じたと思います。

それで，使節団がワシントンに入る前にアメリカの議会ではフィッシュとフランスの力を通して，使節団がワシントンに着くころに，だいたい5万ドルくらいの旅費をアメリカ政府が出すようにしたんです。もしかしたらナイアガラとかどこかのニュー・イングランドの旅に出かけたいだろうから，アメリカ政府はそれをカバーするということで，森も裏でそれをやったらしいです。

そうしてワシントンに入って，はじめのほうは，かなり森と木戸と岩倉との関係もよかったらしいですけれども，だんだん冷たくなっていった。なぜかというと，森は伊藤博文と一緒に話をして，不平等条約の話を真剣にやりましょうかと持ち出した。木戸は，――大久保もそうだったと思いますけれども――なるべく不平等条約の問題を大きくしないほうがいいのではないかという感覚を持っていた。それで木戸が森に対して少し批判的になった。

久米はおそらく木戸と同じような意見か，それに近いような意見を持つようになったと私は思うんです。『米欧回覧実記』を読みますと，森の名前はその一カ所，ワシントンについた晩の雪のなかの歓迎会のことしか書いてないんです。あとの久米と森の関係は，私は資料を読んでいませんから，よくわかりませんけれども，もしかしたら久米は木戸の影響を受けたのかもしれない。森が西洋の文化に対してちょっと弱い，日本語を捨てて英語にするんだとか，西洋の文明をどんどん日本に入れて，日本の文化を捨てるという立場なのについて，使節団のなかのある方たちはあまり賛成できなかった。木戸はその一人だと思います。ですから，もしかしたら，久米は木戸に影響されて，森に対してちょっと敬遠的な気持ちを持つようになったかと私は想像できます。

けれども，それを確かめるためには，日本へ森と使節団と久米とみんな帰ってきてからあとの，そこからの関係を調べなければなりません。久米の立場からは，『実記』だけではなくて，『90年の回顧録』という彼の個人的な日記，思い出，90年間の久米の思い出もあります。そういうものを見ないと，久米と森の関係はよくわからないと思いますけれども，『実記』段階だけでいえば，ワシントンで会ったところで，はじめのほうはよく付き合って，だんだん森に対してちょっと気をつけなければならないという気持ちが出てきたと私は思います。

陳　大変失礼しますが，私も鈴木先生から質問をいただいております。質問は，禅宗あるいは仏教界，さらには江戸では業語が流行していた。先生の挙げられた例のすべて業語と思われるので，こういう言い回し自体が中国から来たものなのか，それとも両方の業語に漢文の素養が使われたのだろうか，というものです。

私の挙げた漢語の変容あるいは変遷のなかのほとんどは業語，あるいは中国では隠語とも言います。隠語は最初必ずあるグループのなかで使われて，そしてだんだん外へ広がって，一般人にも使われるようになるのが普通のルートなんですが，たとえば発表のなかにもありますが，「東坡」や「煙景」ですね。今『広辞苑』にも収録されています。最初は五山禅僧だけが，特殊な人間だけが使っていましたが。もちろん，これは特に中国起源の漢語ですから，ある程度の中国語能力がなければ，これはできないと思います。つまり先生のおっしゃるとおり，これには漢文の素養を必ず備えなければならないと思います。先生，これでよろしいでしょうか。

鳥越　ありがとうございました。それでは田中先生のコメントと各パネリストに質問をいただけますでしょうか。

田中　今日は朝から聞かせていただいて，それぞれの先生方が非常に刺激的な，それからこれからもっと深く議論をしていきたいテーマをお持ちでした。

まず私が今このテーマについて何を考えているのかということを最初に申し上げます。法政大学に国際日本学研究所というものがあります。国際日本学インスティチュートという大学院もできています。これはどういう目的でつくられたかといいますと，今まで日本文学や日本の歴史，つまり日本のさまざまな事柄が各分野で学問として成立していたわけですけれども，しかしそれだけではない分野がたくさん出てきました。たとえば日本文学科で漫画を研究できるかとか，歴史といいましても，従来の歴史研究だけではない，さらに国際的な歴史研究が必要になってきたりして，そういう動きのなかでやはり国際日本学というものが必要になってきました。

「国際日本学」という大変なあいまいな言葉ですけれども，これをどのようなものに考え，またどう

いうふうに育てていくのかということがこれからの課題だと思います。今日のシンポジウムはまさにそのような国際環境のなかで日本文化をどのようにとらえるというテーマだと思っています。

私が「国際日本学」という言葉のなかで特に今つくりつつあるのは「国際江戸学」という考え方です。「江戸学」といったときに，二つの意味がありまして，一つは江戸＝東京の都市としての江戸という意味，それからもう一つは江戸時代の学問，江戸時代全般についての学問という意味で使われていますが，私は江戸時代全般についての学問という意味で使っています。そういう意味で，江戸時代を国際環境のなかでとらえるにはどのような方法が必要かということを考えてみます。

一つ非常に重要なことは「鎖国」という言葉をこれ以上使い続けるべきかどうかという問題があると思います。江戸時代には「鎖国法」という法令は存在しません。ですから，これを今日本史の教科書などではどのように切り抜けているかといいますと，「いわゆる鎖国」という言葉を使っています。つまり，「鎖国」という言葉は本来存在しないという前提になって，「いわゆる」という言葉を付けるようになってきました。

なぜ私たちが「鎖国令」というものがあるかのように思ってしまうのでしょうか。教育のなかでその概念がつくられてきたわけですが，先ほどの久米邦武の文章のなかでもたしかに「西洋人は外交を楽しみ，東洋人はこれをはばかる。これは鎖国の虜囚のみにあらず」，という言葉が出てきましたから，もちろん明治の文献のなかでも「鎖国」という言葉はあるんです。これはなぜかといいますと，19 世紀になってから，志筑忠雄という人がドイツ人のケンペルの文章を翻訳するなかで「鎖国」という翻訳語を使ったものですから，それ以来，たまに知識人が使うことがあったということがあげられます。当然ですが，開国という状況になったときに，「開国」の対立概念としての「鎖国」という言葉を使わざるを得なくなる。これはよくわかる。ですから，明治以降には使うようになります。

そうしますと，江戸時代には「鎖国令」というのはなかったという前提で見なければならないわけです。世界状況のなかで，では江戸時代はどういう時代だったのか。「いわゆる鎖国」というふうに名付けられるのは実際何のことかといいますと，ポルトガル船の寄港禁止令，これは段階的に出されていきます。長崎に対して発布されます。それから日本人の渡航禁止令が出る。これも段階的に出されています。合計五つくらいの法令が出されていまして，そのなかで「鎖国」という言葉は一度も使われていないのです。しかも，それは長崎にだけ発令されていますので，ほかの関係のない藩はほとんどこれについて知らない。あまり知る必要もないという，そういう状況でした。

そのようなことですから，私たちはまず「鎖国」という言葉を頭の中から外さなければいけない。外して実際のところをきちっと見るということが必要になってきます。いわゆる「鎖国令」はいつごろ作られたかと言いますと，ポルトガル船の寄港禁止令と，日本人の渡航禁止令が出されたのは 1630 年代に集中しています。この 1630 年代から 1640 年に江戸時代らしい時代というものが成立してくるわけです。この江戸時代らしい時代というのは何かといいますと，江戸時代的な秩序，中世とは違う秩序と価値観がこのあたりで成立してくるわけです。

システムとしていいますと，外交システムが完成する。「鎖国」が完成するんではないんです。この外交システムのなかには，朝鮮通信使のシステムや琉球使節のシステム，それからオランダ商館長一行の江戸参府のシステムなども入りますし，それと非常によく似た参勤交代が入ります。参勤交代制度と外国人との付き合いとはほとんど同じようなものだと言っていいと思いますが，全体としてこれが外交システムと言えると思います。

このようなことを行なって，それまでの内戦状態を終結させるわけです。内戦状態を終結させるとともに，内戦の種になるようなことを取り払っていくということが政策として行われるんですが，そこから自然に出てきてしまう事柄というのも，結果としてありました。その一つが内需の拡大，つまり国内生産が非常に発達してくるということと，それから，国内で需要と供給のバランスが取れるようになっ

てくるということ。それから江戸という都市に人口が集中してくる。これは参勤交代の作用です。江戸に人口が集中してくるために，世界でいちばん都市人口が多くなってしまった。

世界でいちばん都市人口の多い都市というのはどういう都市であるのかという一つのモデルケースができてくるということです。非常に危険ですよね。都市人口が多いということで，いろいろな危険性を含んでいるわけですが，それをどのように切り抜けていくかというモデルケースができてくる。

ではどのように，国産の素材でものをつくる国に育っていったのか，そのことを考えるときに，さっき言いました国際環境というものを同時に考えないと解けない。

たとえば，典型的に江戸時代の産業と言っていいものは，綿花栽培，綿布なんです。これは江戸時代に国産化が完了して，江戸時代中ずっと綿花栽培から綿の生産をしていて，明治になった途端に貿易自由化したためになくなってしまうんです。綿を織るということ自体は残ります。でも，綿花栽培はやっていかない。綿花栽培から商品まですべてのプロセスを行なっていたのは江戸時代だけだということです。このようなものを見ていくと，一つひとつ江戸時代に国産化していって，経済を支えていたものを見ていくだけで，国際環境との関係がわかってくる。

今日は私の講演の日ではありませんので，これ以上踏み込んでお話ししませんが，基本的な考え方として，そのように，つまり国際環境のなかで見ていきましょうと。それからもう一つは，今は産業の話をしましたが，江戸時代がなぜできたのかということと，江戸時代はなぜ崩壊したのか，つまりなくなったのか。このことも，国の中だけ見ていたのでは解けない課題なんです。これは国際環境のなかで見れば比較的わかりやすい。今日は，なぜできたのかとか，なぜなくなったのかというこの二つにかかわるお話を私はたくさん聞いたような気がいたします。

そこでお一人ずつの話に入っていきたいと思います。スクリーチさんは私が国際環境のなかで考えなければならないと考えるようになっていったそのプロセスに非常に大きな影響を与えてくださっています。古い友人ですし。それからイギリスを中心としたヨーロッパのものが，まさにものが江戸文化のなかに入ってきて，江戸文化をどのように変えていったかということを非常に鮮明に具体的に見せてくださっています。ずっとスクリーチさんの仕事はそういうお仕事です。非常に多くの日本人がそれに影響を受けました。私もその一人です。

今日のお話もその一つだったと思うんですが，今日はさらにさまざまなことを考えさせられました。たとえばイエズス会の問題です。イエズス会がイギリスから追い出された。これが国王を暗殺しようとしたということにあって，推測ではあるけれども，その情報が日本の政策に影響を与えたのではないかということでした。私はそれを聞いたときに，イエズス会問題は，日本がいわゆる鎖国をしたという話と結びつけるのではなくて，イエズス会に対して全世界それぞれの国がどういう態度を取ったかという，そういう見方をしたほうがおもしろいのではないかと思いました。

イギリスもイエズス会を追い出そうとした。日本もイエズス会を追い出そうとした。この二つが同じになりますね。これを「鎖国」という言葉で説明してしまうと台無しになる，つまりそういう比較的な見方ができなくなる。ほかのところももちろんイエズス会を追い出そうとしたとか，イエズス会を受け入れたとか，受け入れたところと追い出そうとしたところと，いろいろなところがあったはずなんです。イエズス会というのはまさに大航海時代のシンボルでした。布教という目的で全世界に出ていったイエズス会が，それぞれの世界でどのように追い出され，拒否され，または受け入れられ，憎まれ，愛され……，またイエズス会から傷つけられた人もたくさんいるはずです，それから助けられた人もたくさんいるはずです……。どういうふうな経過をたどったか，そのこと自体が非常に重要だと思いました。

日本のことで言いますと，先ほどはもう 17 世紀に入って，江戸時代が始まってからのことをスクリーチさんは話してくださいましたが，現実にはイエズス会との戦いは秀吉の時代からありました。長崎

をイエズス会がもう手に入れていました。ご存じのようにキリシタン大名という人たちが増えていくプロセスというのは，つまりイエズス会が日本を制圧していくプロセスです。大名ですから，領地を持っています。年貢を取っています。そうすると，大名が自分の土地をイエズス会に寄進してしまったら，それはすべてイエズス会のものになる。そうやってイエズス会が領地を広げていったら，日本はイエズス会のものになります。こういう筋道があったわけですから，秀吉の九州制圧というのは，そういう意味でなされています。長崎を奪還するわけです。

時代は江戸時代という時代に変わりますけれども，――イエズス会の問題というのはカトリックの問題と言ってもいいと思いますけれども――，日本のカトリックの問題ということで言えば，問題としてはずっと江戸時代まで残って，天草の乱までいくわけです。そうすると，弾圧のことも重要です。なぜ弾圧したのか，そして天草の乱が起こったのか。これも大変大事なことです。天草の乱は農民一揆の側からも見なければならない問題ですから。これはこれで大事なんですが，もう一つ見なければならないのは，やはり世界が……，ここにイエズス会の方がいらっしゃったら申し訳ないんですが，世界がいろいろな意味でイエズス会から迷惑を受けているというその事実はあったと思うんです。これは世界植民地化ということの一つの事例になったわけです。そういう世界状況のなかでの日本の態度というふうにして見なければならない。これがポルトガル船寄港禁止令，それからスペインとの国交断絶ということを行なった桃山時代と江戸時代の決断の理由だと思います。

もちろんイギリス人からいろいろ聞いたところがあると思います。オランダ人ももちろんいろいろ言っているわけなんです，イエズス会やカトリックについて。そういうことの積み重ねが，結果として，江戸時代体制というものを決定した。私はそういうふうに考えました。

それからもう一つは，イギリス側の事情。今日の4人の方のお話は全部，日本側の事情とイギリス側，または中国側，アメリカ側の事情をすべて並べて話してくださった，そういうおもしろさがあったんですが，イギリス側の事情としては，イギリス人であるということを売り込みの一つの方法にしていた。これは現代の問題でもあるんですが，ナショナリストとしての商人というのはなぜ存在しているのかというのは，大変気になる問題です。おもしろいですよね。商業はグローバリズムになっているのに，しかし売り込む商人はなぜかみんなナショナリストになるんです。

こういう不思議なねじれというか，国という単位と，商業という単位の合体，あるいは切り離すほうが便利だというときは，簡単に切り離してしまう，ナショナリストではなくなる。ナショナリストになったりならなかったりというのを，おそらくこのあたりから自由自在にコントロールできるようになっているだろう。つまり真剣なナショナリストではないんです。売り込むためのナショナリストなんです。だから商品が売れるんだったらいつでもナショナリストになるし，商品が売れるんだったらいつでもナショナリストではなくなるというような人たちが，私はこの時代にすでに出てきていると思います。それがイギリス東インド会社という会社です。オランダ東インド会社という会社です。会社と日本は取引をしているのであって，国と取り引きをしていたのではないんです。

これも勘違いですよね。日蘭国交400年というのが数年前にありました。日蘭でも日英でもない。会社というだけです。グローバリズムの時代に入っている商人，そういう現代の問題ともかかわる非常におもしろい話題でした。

それから物品リスト，この船に乗っているものが何であったかということと，それが届いたか届かなかったか。リストにはあるけれども，入っていないかもしれない。これは非常におもしろいもので，証明ができない。そうすると，入っていなかったとしたら，なぜ入っていないのか，日本の商人がなぜ拒否したのかということもいろいろ考える余地があります。

私は絵画がなぜ入らなかったかということについて，一つ心当たりがあるのは，インテリアとしてそういう状況になかったということだと思います。壁がない。壁はありますけれども，皆さんが想像する

ような絵をかける壁って日本の家屋の中にないんです。絵がかけられるとしたら，掛け軸を床の間にかけるわけなので，それ以外の方法は考えつかないんです。額に入った絵が入ってきてしまったら，当時の日本人はなんと思うだろうか，これをどうしようと思うだろうなと想像してしまいます。つまりインテリアとしての条件がない。

特にさっきも裸体画のお話が非常におもしろかったんですが，日本人は春画をどのように見ていたかというと，壁に飾ったりはぜったいにしないわけです。（笑）普通の浮世絵も春画ももちろんそうですが，引き出しのなかに入れている。それで夜になったら……，普通の絵は昼間も見ると思いますが，特に春画は夜になったら，引き出しのなかから取り出して，行灯のもとでひそかに見る。これが春画のいちばんいい見方。そういう見方に，壁に飾る裸体画というのはどうも合わない。そういうようなことが考えられる。

もう一つは文化ヒエラルキーです。日本のなかにある文化ヒエラルキー感。これは中国が世界で最高の国なのであって，その次に日本を含めた漢字文化圏というものがあって，漢字を使わない国はすべて野蛮な国だと思っています。これがヒエラルキーの問題です。野蛮の国からおもしろいものが来たらただおもしろいというだけで受け入れるけれども，それが偉いというふうには思っていない。高級だというふうには思っていないんです。驚いたり，おもしろがったり，すごいと思ったりはすると思います。そういう文化ヒエラルキー感はあったと思います。

それからコックスの「かぶき」の話，私はこれを遊女論とかぶき論のなかで書いたことがあって，コックスは「かぶき」という言葉を使っています。私たちの言うかぶきではなくて，「かぶき者」というふうにさっきスクリーチさんが表現なさったんですが，「かぶき者」とすら言っていなくて，まさに「かぶき」と言っているんです。それでときどきコックスの文章のなかでその実態が見えてくるんですが，さっきおっしゃったように踊り子という意味でもあるんです。「かぶき」たちは――「かぶき」って人間のことを言っているんです――男も女もいて，十数人で「かぶき」グループというものを組んで，あちこち巡業している状況にあります。

そういう様子もコックスの文章を見ていると見えてくる。ここに見えるのは私たちが江戸文化と言っている，歌舞伎や浮世絵があるとか何々があると言っているところから落ちている人たち，つまり歌舞伎役者は江戸三座という立派な劇場で活躍しているスターたちです。しかしそこから落ちこぼれている人たちがたくさんいて，これが踊り子や，いわゆる男女を含めた「かぶき」と言われる人たちで，これは日本国中にいるわけです。

そういう歴史から落ちこぼれている人たちをイギリス人やオランダ人が記録のなかに残しているわけですが，ただ日本の研究者はそれを拾い切れていない。拾い切れていないのは，さっきの「鎖国」と同じように，江戸時代はこういう時代だという規定概念のなかに捉えられているために，かぶきは歌舞伎としてしか見えないというふうになってしまって，こぼれている現象をこれから拾っていかなければならない。まさに神奈川大学の網野善彦さんのような仕事がまだ江戸時代についてはたくさん残っているんです。そういうさまざまなことを考えました。

あとで私がスクリーチさんに伺いたいと思ったのは，これは日本についてということではなくて，イギリス側の事情についてなんですが，日本に交易しに来ようとして失敗するわけです。オランダとの争いがあって，来なくなって，インドのほうがたぶん儲けが多いから，インドに入って行ったと思いますが，どうしてイギリスはそんなに熱心にインドや日本と交易しようとしたのかという謎がある。日本研究者だからイギリスについては知らないと，もしかしたら言うかもしれない。それについてスクリーチさんはどのように思っていらっしゃるのか，あとで伺いたいと思います。

次に王勇さんの今日の発表のあとの先ほどの追加コメントも大変おもしろく聞かせていただきました。私は倭寇研究というのは本当に大事だと思っているんですが，あまり倭寇研究をしている方は日本

でもいない。先ほどの倭寇のお話は大変重要だと思いました。日本側の事情と中国側の事情を並べてくださいました。しかも倭寇がどんな人たちなのかということについて，貿易との関係で話してくださった。私はどうしてそれが大事だと思っているかといいますと，制度上の貿易，それから中国を中心とした冊封制度とは違うところに倭寇の集団というのは存在していて，14 世紀くらいからいるわけです。朝鮮半島や中国に出入りしているわけなんですが，結局最終的には中国の寧波の沖の舟山列島というところに拠点を構えて，そして五島列島との間を行き来することになります。五島列島の福江にも王直の屋敷があって，舟山列島の島の一つにもそういう拠点がある。

つまり国ではないんです。国という制度の外側すれすれの島を利用して，島から島へと動いている人たちなんです。これはまさに歴史的に見えるところからは外れた動きである。それがときどきザビエルとか，そういう歴史のなかに顔を出している。でも連綿としてどういう状況が流れていたか，つまり倭寇だけの歴史というのはなかなか見えてこないです。「倭寇」という言葉として成立してしまいますから，そういう言葉を残したまま日本人がどんどんいなくなっていく。先ほど王勇さんも言っていらっしゃいましたが，中国人がいて，ベトナム人とかタイ人とかポルトガル人までいる倭寇船団というものが成立していって，江戸時代直前までそれが動き続けるわけです。

非常に文化的影響が大きかった。時計を持ってくるとか，ザビエルを連れてくるとか，そういうものはすべてそうです。鉄砲もそうですね。種子島の漂着も王直の船ですから，倭寇船団です。そのような日本の文化とか技術を決定的に決めていくものとしての倭寇。では倭寇独自の歴史っていったい何なのか。海賊と言えばそのままなんですが，でもそういうふうに言って横に置いておけないものとして倭寇があると思っています。これはまさに国際状況のなかの問題だと思います。

それからもう一つ，追加のお話のなかでこれはもう大変にお聞きしたいと思ったんですが，中国への輸出品がほとんど生糸と絹織物だったという遣唐使の時代があったという。ところが，そのあと急激に日本は中国からの絹織物の大量の輸入国になるわけです。ポルトガル船が運んできたものの 90％は生糸，絹織物でした。オランダ船が当初運んできたものの 80％，これも中国の生糸，絹織物でした。このパーセンテージが少しずつ落ちてきます。落ちてくるのは日本の国産化が進んでいるわけなんですが，そうすると，先ほどの宋の時代はなぜそれほど日本ではちゃんと絹織物を作って輸出までしていたのに，輸入国に転換してしまって，しかももう一度国産化を図らなければならなくなったのか。非常に私には謎です。

それからなぜ冊封国にならなかったのか。これはずっと抱えている謎なんです。なぜ日本は最後まで中国の冊封国にならなかったのか。朝鮮半島も琉球王国も冊封国で，中国皇帝の家臣としての国王というものをもって，そして中国に毎年，冊封使節を送ることで，さっきおっしゃったように，貿易をしているわけです。非常に有利な貿易を展開できるというのがわかっているのに，冊封国にならないわけです。義満の時代に本当に短い間，義満が日本国王を名乗りますが，それもすぐやめてしまいます。

先ほど伺っていたお話で，結局あまり交易しないで本を買ってくるという話で，ああ，そうかと思ったんですが，もしかしたら日本はもともと貿易にあまり熱心でなかったのではないか。これも国際状況のなかでの比較の問題です。ほかの朝鮮王国や琉球王国が非常に熱心に貿易を展開して，そのために冊封国になった。にもかかわらず，日本はそうでないとしたならば，案外に交易に熱心ではなかったのかもしれない。

ではなぜなのか。貿易の利益ということを念頭に置かないということは，もっと大事なものがあったのか。そういうことが非常に気になりました。もしお考えがあったら，あとでお聞かせいただきたいと思いました。

それから，先ほどの中国のさまざまなものを貰いながら日本は独自の文化をつくってきたということ，これは王勇さんのご発表でも，陳先生のご発表でもそういう話を聞かせていただいたんですが，特

に私が注目したのが，陳さんのレジュメのなかの安原貞室『片言』に「味噌のからなを東坡と付けたるやうのことは」のあとなんですが，「やさしく侍る」，この文章がまさにこれは日本化していくときの意識だというふうに思いました。「やさしく侍る」というのは，唐名＝中国名の味噌に「東坡」というふうにつけたのが，すごく優雅だな，という感じです。すてきに優雅だと言っているわけです。

「かやうの境」って，なぜ境か。和漢の境，和と漢の境をこんなふうに使っていて素敵だなと言っているわけです。まさにこの和漢の境ということをずっと言ってきたんです。これは平安時代の文化もそうですし，『古今集』そのものが仮名序と真名序を持って，始まるわけです。そこに典型的に表れているように，和漢の境という概念を作り上げて，そして中国でもあり日本でもあり，中国でもなく日本でもない，その境目を狙っていくんですね。

狙っていくんですが，おそらくそのプロセスのなかには極端な態度を取る人がいたはずです。先ほどの森有礼の例を聞いていて私はすごくおもしろくなっちゃったんですが，日本語をやめて英語にしようという感覚と同じように，もう日本をやめて中国になろうとか。それから，特にこれは江戸時代には儒学者のなかにこれがあるんですが，もう中国のほうが絶対いい，日本なんかやめたほうがいい，日本でなくなったほうがいい，全部中国になろうという，その感覚です。それを極端に言っている人がいる。

じゃあ，どうして国学というものが出現するのかというと，そういう人たちがいるからなんです。中国だという人たちがいるから，いや，日本だという人たちがバランスで出てきた。国学者というのも成立して，もう「漢心」なんかいらないと言い出した。中国精神なんか邪魔者だ，日本は大和心を持つべきだ，これはもっと直き心だ，素直な心だ，学問なんて要らない，というところまでいく。これはまた極端な事例です。そして徹底的に日本語を研究するわけです。

今のナショナリストと違うのは，江戸時代の国学者って日本語研究者なんです。日本語とは何か。これは中国の言葉を受け入れているという前提があって，初めて日本語とは何かということを考えるわけなので，これも国際状況のなかで考えないと意味がない。国学者は国際状況にさらされている江戸時代のなかで初めて出てくるんです。江戸時代は初めて庶民がヨーロッパ人と接触した時代，つまりオランダ商館長一行は長崎から江戸まで来るわけです。江戸に１カ月も滞在しているわけなんです。こういうオランダ人たちを見たくて，北斎の絵に出てきますが，庶民たちが長崎屋というホテルに押しかける。

朝鮮通信使と詩のやり取りをしたり，朝鮮通信使の接待をする人たちが出てくる。琉球使節たちと交流する人たちが出てくる。こういうふうに江戸時代は，日本の歴史上初めて，僧侶でも貴族でも政治家でもなく，庶民が外国人と接触する時代になったわけです。そういう状況のなかで国学者というものが出てくる。

そうしますと，両極端がいたはずなんです。この両極を抑えながら，どっちにも行かないような良識みたいなものがどこかで働いていって，和漢の境というところを狙っていくような動きになっていくんです。ぶれながらそういうことに落ち着いてくるんだと思います。これは方法なんです。和漢の境を狙う方法と言えばいいんでしょうか，その方法を持ったんです。

ある意味では編集法，編集能力と言ってもいいです。外国から来るものをたくさん受け入れながら編集していく方法，たとえば秋田蘭画という秋田藩に成立するオランダ絵画，これはスクリーチさんも研究していらっしゃいますが，これはヨーロッパ側から見ると，まさにヨーロッパ絵画ですが，日本側から見ると，日本画の要素，中国画の要素，そしてヨーロッパの絵画の要素，この三つの要素が渾然一体となって非常に不思議な世界を作り上げています。

それが和漢の境という感覚ですから，西洋的なものが入ってきたとしても，和漢洋の境とちょっと複雑になるだけで，この境目のところを狙って編集していくという意味では同じだと思います。そういうことを王先生，陳先生のお話しに感じました。

また先ほどのコルカットさんの久米邦武のご研究のなかからも大変おもしろいことをたくさん感じま

した。教育に関心を寄せるというのはその当事者にとって何だったのかということを思いながら聞いていまして，教育に関心を寄せるといっても，教育がないから，つまり日本に教育というものがなかったから関心を寄せているのではないわけです。

ご存じのように寺子屋，つまり手習いはものすごい数あります。幕末，一つの村に五つくらいの手習いがあったりする水準にまでなりますので，手習いというものが存在していて，識字率という意味では調査がないのでわかりませんが，ひらがなの識字率は非常に高い。漢字の識字率は低いですが。今のように，漢字かな混じり文で調査できるという状況ではなくて，ひらがなを使う人と，漢字を使う人と分かれているわけなので，ちょっと複雑ですが，ひらがなの識字率ということでは非常に高いです。これはつまり手習いがたくさんあったことからです。

それともう一つ障害者，盲人たちが教育を受ける施設，これは教育というよりも職業を得るための当道座という組織がありまして，盲人たちはその組織に入ることによって小さいころから教育を受けつつ，目の開いている人はできない，つまり盲人だけが独占している職業に就くことができるわけです。この組織が明治以降なくなっていくわけですが。そのようなものがあるのに，しかしアメリカに行ったときに，教育の制度を，こうやって本当に熱心に学校を見て回って，何か導入しようとしているわけなんです。だとしたら，今まであったもの，これからあろうとするものとの違いに気がついていたので，それは何だったのかということが大変気になりつつ，大変おもしろい課題だなと思いました。

ちょっと言葉にしてみますと，おそらく江戸時代にあった教育は必要としての教育だったと思います。制度ではないんです。江戸時代には文部省はないですし，学校をつくれとだれも言いません。義務教育という制度ももちろんありません。つまり制度としての教育は存在しない。でも実際の教育は存在するんです。その状況から見たときに，制度としての教育というものが見えたのではないかと思います。そういう意味での関心だったのかどうかについて，あとでコルカットさん，お考えを伺いたいと思いました。

そういう意味で日本だけではなくアジア全体の問題としてのある世界状況のなかに巻き込まれていくというのが近代化だったと思います。それぞれの近代化があったと私は思っているんですが，近代化について日本の歴史が一つ勘違いしていたのではないかと思うことがあります。それは何かというと，黒船という言葉に象徴される……，つまり眠っていたのに目が覚めたというあの言い方です。

アメリカ側の事情を考えると，ご存じのように，ペリーが来るのは捕鯨のためです。つまりアメリカは当時は捕鯨がいちばん盛んな時代で，そして直後になると，電気が発明されたりすると，それほどでもなくなるんですが，鯨油というのは明かりの面でも，さまざまな面で必要なものでしたから，アメリカはものすごい勢いで捕鯨をしている時期です。そうしますと，沖縄と日本が必要，つまり捕鯨船のエネルギーの供給源，それから水の供給源として必要です。沖縄のほうが大事，ペリーの戦艦にとっては。ですから日本に1回来ると5倍くらいの回数，沖縄に行っていますよね。ついでに日本も行くかというくらいだと思います。本当は中国をマーケットにしたいというのがあって，これがまさにコットンの展開，綿布の話です。そういうマーケットも欲しいのですけれども，供給地も欲しいアメリカ側の事情というものがあります。

アメリカ側の事情で来ていますから，それに対して日本は応えなくてもいいわけです。応えなくてもいいんですが，あのようなかたちで応えている。応えたのか応えなかったのかという問題であって，開国させられたとか，目覚めたとか，そういう話ではないわけなので，これもまたお互いの事情というものをちゃんと見なければならない。これが国際状況のなかで見るということだろうと思います。

この国際状況で見たときに，では当時の19世紀中ごろの国際状況，まさにグローバリズムのなかの商業の状況というのはどういうものだったのかという目で日本の幕末，開国というのも見えてくるはずだと思っています。

江戸時代が成立したことの一つの話として，先ほどの陳先生のご発表のなかで神谷寿禎の話が出てきています。これも私は，ああ，そうか，やっぱり神谷寿禎の銀山の開発技術の入手には僧侶がかかわっていたのだな，五山の僧侶がかかわっていたのだなということをあらためて思ったわけですが，この江戸時代の出発ということを考えたときに，やはりキーワードになるのは銀なんです。

神谷寿禎から始まって，江戸時代に入ってもまだずっと続く銀生産，これが日本の場合には石見銀山をはじめとして生野銀山とかいくつもの銀山の開発をやって，銀をどんどん出して，一時期は世界でいちばん大量の銀を中国に対してだけ支払っていたわけなんですが，ただそのときに同時に起こっていたのは，地球の裏側でスペイン人が南米に入ったことです。南米のペルーとメキシコで銀山開発が始まります。戦国時代に銀山開発をしている日本と，地球の裏側でスペイン人がペルーとメキシコで銀山開発しているという，このこととは重なってきますので，これが経済のグローバリズムなんです。

そのことが私は遠因として，江戸時代の成立と関係があると思っています。つまり簡単に言うと日本は経済力を失ったということです。日本は銀の力に頼んで戦国時代を展開していって，しかもそれがあったために大量の鉄砲を作ることができて，大量の鉄砲があったために秀吉が朝鮮半島に兵隊を送るわけです。これはハイテク戦争です。ところが負けて帰ってきたわけです。ですから，これは銀の経済力が背景にある。

対外戦争，植民地戦争，当時はおそらく秀吉は植民地という考え方をもう持っていたと思います。それで失敗して江戸時代になるわけです。そうすると経済的な凋落と敗戦体験というこの二つがあって行き詰るというのが，私は江戸時代の出発，つまりもう一つの違う価値観を持った時代をつくり上げない限り，日本は生き延びられなくなったということだと思っているんです。

そのようにして始まった江戸時代ですから，銀を頼んでというわけにいかない。鉱物資源はもうほとんどないんです。金もなくなった，銀もなくなった。あとは銅しかないので，オランダ東インド会社に銅で払わなければいけない。そのようにして経済的な力を失っていった日本というのは国産の時代に入るしかないわけなので，中国からものを買っているだけでは間に合わなくなりますから，日本がものを作らなければならない。それも江戸時代ができていく一つの事情だと思います。それと裏返しに江戸時代がなくなるもう一つ事情というのは産業革命がヨーロッパで起こり，植民地がどんどん広がっていく。この事情が今度は開国のときには関係している。

鳥越　これで質問をお答えいただいて今日は終了ということになろうかと思います。それではまずスクリーチ先生，英国側はインド交易に非常に熱心に…？…。

スクリーチ　たぶん途中でイギリス人が自分に対して同じ質問をしたと思います。なぜここまで来ているか。オランダは先に行きますね。日本だけでなく，バンタムにもインドにも，イギリスよりもオランダは先について，オランダ人の大げさなニュースを聞いて，オランダが大もうけしているというううわさがイギリスの耳に入ります。オランダがそんなにもうかれば，われわれは同じことができるんじゃないかと思ったと思います。

それともう一つは外国に行って貿易をすることが一つのポイントでしたけれども，もう一つのポイントはポルトガル船を奪うんです，マカオから長崎に行くのを。ポルトガル船は毎年1隻，非常に大きい船が来まして，それを奪うことができれば中国まで行かなくていいんです。全部ポルトガルからとる。結局，日本で儲からないせいで平戸イギリス商館がわずか10年間あとでクローズされたんです。それとちょっと冒険旅行をしたかった人もいると思いますね。あとはスペインがあちこちに行って，南米からたくさんの銀を持ってきましたから，われもわれもという感じですね。

もう一つ付け加えてもいいですか。ケンペルというドイツ人の本から「鎖国」の言葉が訳語として日本語に表れていると田中先生がおっしゃられまして，そのとおりですが，もっと複雑ですね。ケンペルはもちろんドイツ語で書きましたけれども，ケンペルの原稿が出版されないうちに死にます。結局その

原稿はドイツの田舎の彼の実家に眠っていて，結局イギリス人がそれを買ってきて，イギリスに持ってきて英訳するんです。その英訳をした人がスイスの若い人です。スイス人のドイツ語はちょっと変なドイツ語です。それと，そのスイス人が英語はあまりうまくできませんでしたから，ケンペルが本当に書いたドイツ語とは違う，けっこうおかしい，誤解の多い英訳です。それに日本人はドイツ語が読めないですから，オランダ語版が日本に来たんです。だからこういう複雑なルートで日本に戻ってきた「鎖国」という言葉ですから，それは途中でいろいろなニュアンスの間違いとか，完全な誤解が入っていると思います。

鳥越　王先生，日本と中国における絹問題というのがありましたね。

王　絹，シルクロードが古代の東アジア世界においてはあまり成立しなかったというふうに思いますけれども，弥生時代から，卑弥呼から中国の三国の魏に貢がれるもののなかですでに絹がいちばん重要なものになっているんです。もう日本では弥生時代からシルク類の生産が始まっている。唐の時代では，特に朝鮮半島からの渡来人，「太秦」の例に象徴されるように，渡来人がもたらした技術などによって大量生産が可能となったことです。それが一つ。

もう一つは，商売ですとコストがとれない。「人命が地球より重い」という言葉があるように，遣唐使は大ざっぱに言うと3分の1くらいの人が死んでしまうんです。3分の1くらいを死なせるまでシルクを求めるか，こういう商売はもとが取れない，コストが取れない。だからその国においても商業的な価値は成立しないです。

どうしてたくさんの犠牲者を出したかというと，東野治之先生の説明，解釈がいちばんまっとうかと思いますが，貿易ですと，貿易のルールでいくんです。たとえば中国に市がいつ開かれるか，いつ売れるか，あるいはいちばん短い航路は何なのか，いつごろ行けばいいのか。そういう基本的なルールで考えますが，遣唐使の航海時期がそれと違います。遣唐使にとって元日の中国側の儀式に合わせるために無理やりに出発しなければならない。悪い天気でも出発しなければならない。それは日本から出発して浙江あたり，揚子江の江都あたりに到着して，それから運河を北上して長安に至る時間を計算するんです。元日到着のチャンスを逃したら今年はやめます。来年再度挑戦することになります。だから長いときは，いい風が得られなければ1年，2年，3年，4年まで待つんです。だからこの意味では，次の問題になるんです。

遣唐使自体は商業ベースで行ったのではなくて，あくまでも政治的な儀礼的なものです。先ほどコメンテーターはなぜ冊封国家でなかったのかと問われました。それはまだ学会では未解決の問題です。冊封国家なのか，要するに中国の政治的なシステムに入っているのか，入っていないのか。それより大きな問題は，冊封国家と言っても一元的なものではないことです。距離的な遠近，文化の発達，高低，また関係の親疎，親しい関係なのか，どういう関係なのか，などによって内容が異なる。これが前提です。

日本は，一応元日の朝賀に出ることで，中国のシステムのなかでは冊封国家に入ります。しかし絶域ですので，それにまた日本では20年に1回でしょう。20年に1回という約束で来るんですけれども。だからこれは冊封体系という言葉にとらわれずにケースバイケースで考察したほうがより妥当であるかもしれません。もし冊封か否かにとらわれすぎると遣唐使は今の政治関係のように見えてくる恐れがあります。唐の対外関係のなかにもいろいろな次元がありまして，たとえば日本からの国書があったかどうかだけでも，これはまだ学会では解決されていない。国書を持って行かなければ中国では受け入れられないはずだ，そのとおりですけれども，政治的思惑が混入されると，正しい判断を妨げます。

一方，中国，唐から日本へもたらされた国書は，今はっきりわかっているのは，少なくとも二通あります。日本が持っていかずに中国からもらうというのはおかしな話で。それに，いろいろな事件があって，必ずしもほかの冊封国家と同等に見るのではない，あるいは冊封という言葉を使わずに，日本独自

の中国との交流関係がある。これについては実は昨日，横浜の駅でばったり会った鈴木靖民先生と東野治之先生，お二人がＮＨＫのテレビ番組で出した説明が妥当かもしれません。

すなわち日本の当時の対外関係は二元的で，たとえば『延喜式』を見ると，日本では中国のことを「隣国」というんです。朝鮮半島の国を「蕃国」といいます。「天子」はこういう場合に使う，「天皇」はああいう場合に使う，「皇帝」はこういう場合に使うという，そういう中国の冊封体系のシステムが，日本で存在しているんです。朝鮮半島を「蕃国」というのは西側の夷，東の夷は南東諸島，日本では小中華が成立しているんです。小中華が成立しているから，日本で独自の中華思想，冊封体系が築かれている。「六国史」を読みますと，日本では立派な朝貢圏が成立しており，新羅の人が来て，国書に「朝貢」の言葉がないと，それは退けるとかですね。日本にはそういうものがあって，逆にもっと別な朝貢圏にも入っている，あるいはそういう政治的なシステムを経験した人がいる，経験しないと自分でつくることはできませんから。だから二重的という説が大変魅力的です。

外交的には中国を中心とする政治圏に入っているし，また国内では別に朝鮮半島とか南東諸島とか，こういう国々を含めて独自の「小中華」という言葉が使われます。そこで，二重構造ということが言われています。そうすると，遣唐使はこの意味からいいますと，やはり政治的な色彩が非常に濃厚です。貿易どころではないです。

それが9世紀以後になりますと，貿易商人が発達しますと，遣唐使の歴史に終止符が打たれますけれども，9世紀以後，宋代に至るまで中国と日本の間にシルクの持続的かつ大量な交易の記録は，私は寡聞にして知らなかったんです。それはずっと江戸，近世以後になって，先ほどどなたかがおっしゃったように，銅などを通して，また別の意味でシルクが一つの貿易のメイン商品になる，そういう変化の過程はこれからもっと追究していくとおもしろい結論が出てくるかもしれません。

田中　陳先生に具体的な質問がさっき言えなかったので……。陳先生には，先ほど五山文学の文体，中国文を使った中間文体が出てきたというお話は大変興味深かったんですが，この中間文体は後の日本の文体の問題に影響を与えたと思われるかどうか。

陳　言語の専門ではないですが，たぶん後ほどの文体に影響は及ぼしたと思われます。あとの策彦周良や江戸以降のお坊さんの日記あるいは文章を見ても，この影響が残っているのではないかと思っています。

鳥越　コルカット先生には，江戸のころの必要とした教育と，国家制度としての教育という問題……。

コルカット　久米さんは肥前に生まれ育ち，そして彼のお父さんは大名の顧問で，久米は若いときから藩校で勉強して，そして周りの事情をよく知っていたと思います。おそらく肥前では寺子屋とかそういう組織されていないような組織があったはずで，彼はそれを認識したと思います。そこから江戸に行って，また自分の勉強を続けて，幕府関係の教育を受けて，外国へ明治4年に出かけた。だからもちろん久米の受けた自分の藩と江戸での教育のレベルは高かったんです。そして，おそらく藩と江戸での教育の可能性，――あの時代の学問はばらばらだったかもしれませんけれども――水準の高いところが日本にはあった，と彼は認識したと思います。

私の読んでいるところで，彼は日本人の可能性，才能をばかにすることはないです。かえって，日本人は普通の日本人でも西洋人より才能があるというところを彼は強調するところもあります。たとえばアメリカでウエスト・ポイントの軍人の学校へ行ったんです。そこでこれから軍人になる若者，18歳か20歳そこそこの若い人が練習して，向こうに的を出して，自分の鉄砲か大砲を撃って，だれも当たる人がいないんです，みんな失敗して。久米たちはそれを見ていて，『実記』を読みますと，久米は，もしこの場合日本人でしたら，おそらくみんなが当たったのではないか，ということを書いています。要するに日本人は西洋人よりニンブルで〔＝機敏で〕，頭と指は早いとか，そういうことを彼は強調するところもあるんです。ですから日本人の可能性について，久米は絶対ばかにすることはないと思いま

す。

問題はおそらく今おっしゃったとおり，組織。日本の場合は教育はちょっとばらばらで，場合によって高いレベルの教育があるんですけれども，一般の人はそこまでは届かない。またはある人は寺子屋を通してある程度仮名はできるんですけれども，高い教育のレベルになっていない。それについて，西洋から具体的なプラクティカルな，日本の将来を考えていちばん役に立つような，皆さんが受けられるような教育を考えたほうがいいんじゃないか，と彼は書いています。もちろん旅をしながら田中不二麿と，ほかの５人，６人くらいや木戸とよく話をして，そういうことについて膨大な資料をおそらく集めたと思います。そのばらばらの資料よりも全体的な正論をこれから考えなければならないという全体像もあったのではないかと私は思います。

田中　この配付資料に書いてあるアメリカの学校には，もうこのときには，たとえば義務教育制度などがあったんですか。

コルカット　部分的には，たとえばマサチューセッツ州とか，ある州にはそれに近い制度ができたと思います。ほかの州はまだそこまではやっていないです。そして彼は必ずしもそういう制度をどうしてもしなければならないということを強調しないんですけれども，心のなかではやっぱりそういう方向に彼は考えたのではないかと私は解釈しています。

鳥越　ありがとうございました。本当はこれから自由討論になるとますます盛り上がっていくだろうと思います。残念ながらぼつぼつ時間が来てしまいまして，本当に残念な限りですが，長時間にわたり刺激的なお話をしてくださったパネリストの先生方，本当にありがとうございました。そして，鮮やかなコメントと討論を盛り上げる質問をしてくださいましたコメンテーターの田中優子先生，ありがとうございました。

田中　しゃべりすぎたために議論が……。

鳥越　とんでもありません。ありがとうございました。そして，また熱心にお聞きくださいました会場の聴衆の皆さん，そしてこれまた議論を盛り上げる質問をしてくださいました方々，本当にありがとうございました。

実は，私はイエズス会士ではないんですが，イエズス会の学校で勉強したせいもありまして，若干同情的な面もあるんですが，たしかにいろいろと問題としてはおもしろいなと思っておりまして，また機会がありましたら，今度はイエズス会を巡るシンポジウムとかそんなのもいいかなと思ったりいたします。

というようなわけで本当に皆さんに感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。お気をつけてお帰りください。（拍手）